

心理臨床学における両義的な身体性についての一考察

篠田 亜美

1. はじめに

心理臨床学は、大きく言えば“こころ”がテーマとなる分野である。面接の中で身体の不調に関することが述べられたとしても、医師のように直接身体を観察し、何らかの働きかけが行われることはほとんどない。

しかし“こころ”がテーマとなる心理臨床学においても、“からだ”は一つの大きな関心事であり、それは「自己の自己性の成立そして他者性の成立において、身体と言うものがどれほど大きな役割を果たしているか」と大山（2009）が指摘するように、私が私らしく唯一無二の存在として生きていくことに、身体は大きく貢献しているからであると思われる。

身体には様々な側面があるが、本稿では“AであるけれどもBでもある”という、相反する性質、つまり両義性に注目したい。相反する性質は、並列的なそれに比べ違和感をもたらす。相反する性質のどちらかに偏ることなく、その違和感を抱えたままその二つの性質の間を揺れ動くことは、その両義的な性質が相互に関係性を持つことにつながる。このような身体の両義的な二つの側面の関係性、つまり“身体と身体の関係性”や、そのような相矛盾する存在である“私の身体と私の関係性”は“私”の成立を大きく支えるものであると考える。しかし、一口に両義的な身体性と言っても、身体には様々な側面があるため、それぞれが微妙に絡まり合いつつも雑多に成立しており、両義性という観点から系統的に論じられてこなかった。そこで、本稿では様々な身体の側面を並列的に捉えるのではなく、それらを多面的で多次元的な両義性として捉え、両義的な身体性の様相を明らかにすることを目的とする。

2. 現象としての身体

心理療法では、「身体が生きている現実」や「生きられる身体」（河合，2000）と言った、実際に私たちが主体的に体験している身体が重要視される。私たちが日々出会う身体には両義的な二つの顔だけでなく、様々な顔があり、両義性を考える際にもそのような様々な顔をもつ生きた身体について考えていくことが必要と思われる。哲学者の市川浩は、『精神としての身体』（1975）において、私たちの前に表れ出る様々な身体を「現象としての身体」として提示している。この市川の「現象としての身体」は、しばしば心理臨床学においても引用され、心理臨床学における身体についても様々な示唆を与えてきたが、その中では「現象としての身体」の一部を紹介するに留まっている。本稿で身体の両義性を詳細に検討するに当たり、日々私たちが出会う「現象としての身体」がどういったものかを再度確認しておくことは有用であると思

われる。

2.1. 主体としての身体（主観身体）

市川（1975）は「内面からそれを生き、直接にそれを把握している」身体であり、「ふつうそれ自体としては意識されないままにとどまっている」ような、あらゆる意識現象の前提となる身体として＜主体としての身体＞¹を挙げている。「ふつうそれ自体としては意識されない」上に「限定された明確なたちをもつわけではない」（市川、1975）ため、この身体の側面を捉えようとするのは難しく、捉えたと思ってもその時点ですでに対象化されてしまい、この＜主体としての身体＞そのものではなくなってしまうという性質を持つと思われる。濱野（2008）はこの＜主体としての身体＞と心理臨床との関係において、「この身体への気づきは、＜私＞という意識現象を成り立たせている時空間上のこの世にひとつしかない生きた場としての＜私＞の身体の自覚を促す」と、“私”の成立にとって、この身体に「気づくこと」の重要性を述べているが、この身体自体を意識しようとするのが難しいと考えると、この身体があるというその事実気づくことが必要であると思われる。そして、そのような性質ゆえに「この世にひとつしかない生きた場としての＜私＞の身体の自覚」（濱野、2008）は常に、“そうではない身体”の自覚と対となって表れてくるのではないだろうか。＜主体としての身体＞の対となって意識に登る“そうではない身体”とは、次に見ていく＜客体としての身体＞であると考えられる。

2.2. 客体としての身体（対象身体）

＜客体としての身体＞は、「外側から把握する身体、つまり対象化された私の身体」（市川、1975）と説明される。市川（1975）はこの身体の特徴として、「自己と対象との同質性と異質性を明確に把握させ、単なる印象ないしあわれをこえた対象の客体性の理解を可能にする不可欠の契機の一つ」となることを挙げている。つまり、一対象としてその他の対象と並列的に捉えられることで“私”とその他の対象の比較が可能になるため、自他理解を深める役割を持つと考えられ、この身体も“私”を支える重要な身体の一つと言える。

この身体のもう一つの特徴として、「身体に外面性をあたえることによって、私と身体とを分離する」（市川、1975）ことが挙げられている。市川（1975）は、この特徴によって次のようなプロセスを可能にすると述べている。「さわる私」と「さわられる私」が分離されることで「私はさわられている私にさわっている」（市川、1975）という構造が生まれる。そして、「この二重化はさらに内面化されて、さわっていることに気づいている私を発見させ、さわっているという思いの純粹化へと私をいざなう」（市川、1975）としている。つまり、＜主体としての身体＞である「さわる私」だけでは、「意識現象の前提」（市川、1975）でしかないが、＜客体としての身体＞である「さわられる私」が同時に現れることによって、この両方を把握しようとする視点を得るためには、さらに第三の「さわっていることに気づいている私」（市川、1975）が必要となる。この第三の「気づいている私」は、さわる／さわられるという関係をめぐって発生したものでありながら、さわりもさわられもしていない点で、身体から離れた「思いの純粹化」（市川、1975）につながる。そして、さわる／さわられる関係に、主客の関係が見られるが、

¹本稿では引用文は「」で示しているが、市川（1975）では、＜主体としての身体＞というように、一つ概念として＜＞を用いている。煩雑になることを避けるため、引用部分ではあるが、本文で＜＞で表記されているものについては、＜＞を引用符として用いることとする。

そこに“私”という言葉がつくのは、＜主体としての身体＞ありきで成り立つ現象であること
をよくあらわしており、そういった意味で＜主体としての身体＞は「意識現象の前提」（市川、
1975）なのであろう。

上記のことからも、＜客体としての身体＞が“私”の成立にとって重要であるのは、＜主体
としての身体＞と対になって考えられるからである。しかし、＜主体としての身体＞もそれ単
体で注目しても意味がないのであり、＜客体としての身体＞との関係でこそその意義が見出さ
れることを忘れてはならないと思われる。

2.3. 私にとっての私の対他身体

「他者によって把握された私の身体として、私がとらえる身体」（市川、1975）が＜私にとっ
ての私の対他身体＞である。市川（1975）は、この身体が現われる場面として、他者に愛撫さ
れることや、他者にくすぐられることを例に挙げ、他者の身体が「物体としての身体ではなく、
はたらきとしての主観身体」であり、その「他者の主観身体に把握されたものとして、自己の
身体」を私が認識することが、＜私にとっての私の対他身体＞であると述べられている。

確かに愛撫される感覚やくすぐったさは、自分で自分の身体を撫でたり、くすぐったりする
のとは異なる感覚である。それは、＜客体としての身体＞で取りあげた、＜主体としての身体
＞と＜客体としての身体＞の間に起こるような、単にさわる／さわられるという“主客”を循
環する現象が“私”の中で完結するのに対し、＜私にとっての私の対他身体＞では、自己と他
者の二者間での“主客”の反転が起こっており、先の“主客”の循環とは質の異なる循環が起
こっているからであると考えられる。本来は自己の側からすれば、自分の身体が“主”で他者
の身体が“客”であるはずだが、他者に把握された自分の身体を捉えようとする、他者側に
立って他者の身体を“主”として捉え、その“主”が自分の身体を“客”としてどのように捉
えているかに接近しようと試みるものの、完全に他者になりきることはできないため、“そのよ
うに私が認識する”という、自己を“主”とする視点へと返ってくるという循環が起こる。こ
の循環の中では、自己の身体も、他者の身体も、“主客”の二重性を帯び、それがめまぐるしく
交代していることが分かる。そして、市川（1975）が、単なる＜私の対他身体＞ではなく、「私
にとっての」という言葉をつけたように、結局のところ「他者によって把握された私の身体は、
現象学的に記述することができない」のであり、そのもどかしさが、愛撫やくすぐったさのよ
うなもどかしい感覚につながるのであると考えられる。

そしてこの身体のもう一つ特筆すべき特徴として、＜対他身体＞（傍点筆者）の他は、「私の
対他身体は、対他者身体 *corps-pour-autrui* にほかならない」（市川、1975）が、その下層には、
「一つの原初的な自己把握である前人称的な対他物身体 *corps-pour-autrechose* が潜在している」
（市川、1975）という点が挙げられる。これはふれている対象が物体であっても、ふれている
身体が、物体にふれられている身体としてとして現れ、“主客”の循環が起こるということをし
ている。これは、心理臨床において重要なテーマである“共感”と関係すると思われる。身
体という文脈からすると、“共感”は自己の側からは対象として捉えられる他者の身体が主体と
しても働いていることの実感が基盤になると思われるが、これは相手にも気持ちがありそれを
尊重すべきであるという道徳的な話ではなく、私たちは身体を元に自己と対象の間に“主客”
を循環させて認識するという様式を持っているということに基づくと言える。そういった意味

で、真の“共感”の根底には、身体性が大きく関与していることが示唆されるのではないだろうか。

2.4. 他者の身体

この身体は、「科学があつかう客観的身体の基礎ともなるものであるが、私の対象身体と同様、決してそれと同一視することはできない」（市川，1975）ものであり、それはこの身体が、「つねに表情的であり、なにほどこかの主観性をおびている」（市川，1975）ことに基づく。ここまで見てきたように、＜私にとっての私の対他身体＞が現れるには、“主客”の循環を起こさせる＜他者の身体＞が必要であり、＜主体としての身体＞と＜客体としての身体＞の二つが共に現れることに意義があったように、＜私にとっての私の対他身体＞と＜他者の身体＞も二つをセットで考えることに意義がある。

そして市川（1975）は、＜私にとっての私の対他身体＞と＜他者の身体＞は「潜在的なレヴェルでの社交空間」を与えると述べる。身体的な存在として他者の目の前に現れるだけで、＜他者の身体＞との間で潜在的に“主客”の循環が起こることは、「潜在的なレヴェル」（市川，1975）で他者との交流が起こっていることを示唆していると思われる。大山（2009）は、身体の両義性の一つとして「身体は、私と他者を絶対的に隔てているものでありながら、身体を介してこそ私と他者はつながりうる」ということを挙げているが、「身体を通してつながる」ということは、身体が「外面性を与える」ことで相互に触ることができるというような、ツールの意味だけではなく、他者との交流の場を生成するという側面を身体が担っていることを示唆していると言えるのではないだろうか。

2.5. 錯綜体としての身体／＜身＞

市川（1975）は、ヴァレリー（Valery, P, 1932）の「潜在的なものの総体」である「錯綜体」という概念を取り上げ、「これまで記述してきたどの身体にも入らないもう一つの身体」を＜錯綜体としての身体＞としている。市川（1975）は「われわれが日々生きている具体的な身体においては、主体としての身体、私の対象身体、私にとっての私の対他身体は、（ときとしてその相関者としての他者の身体をも潜在的に含意しつつ）わかちがたく融合した一つの統合体としてはたらいっている」ものであり、「このような身体概念をつきつめてゆけば、（中略）非実在としての身体に、いたる」として、ヴァレリー（Valery, P, 1932）の「潜在的」を“統合の可能性として存在する”と捉えている。

さらに市川（1993）は、＜錯綜体としての身体＞は、「現象としての身体」の記述をこえている」として、日本語の「身」という言葉が多く存在様式を表していることに注目した＜身＞という概念を新しく提示している。＜身＞とは精神でもなく、身体でもない、それらを統合した存在であり、この概念は人間を身体の外から全人的に捉えようという試みであると考えられる。つまり、身体が何であるかを捉えようと突き詰めていくと、（そしておそらく精神や“こころ”の外から突き詰めても同様の結論にたどり着くのであろうが、）“こころ”とも“からだ”とも言えない存在または領域にたどり着くということを示唆していると考えられる。しかし、田中（2003）は、心身症における夢に見られた身体について考察する中で、「本当の問題は心身が変な具合につながっていることであり、その治療の眼目はむしろ、その「変なつながり」を断ち切ることの方なのではないか」、「こころ」は「こころ」として、「からだ」は「からだ」とし

て体験しうることこそが、現代に生きるわれわれの「こころ」と「からだ」のかかわりには重要な意味をもつ」と、心身一如、心身合一を安易に求めることに対して警鐘を鳴らしている。＜錯綜体としての身体＞は「非実在としての身体」（市川，1975）と説明されるように、実際に私たちが目の当たりにする身体の後方で常に実在する可能性をも含めた存在であると考えられる。そのような、“実在前”の身体に目を向けることも身体を考える上では重要かもしれないが、本稿では実在する身体の両義的な側面に焦点を当てていくこととする。

3. 心理臨床における身体の両義性

大山（2009）は身体の両義性に二種類あることを指摘している。一つは、「私と他者を絶対的に隔てるものでありながら、身体をとおしてこそ私と他者はつながりうる」ことであり、もう一つは「それが私であり、かつ私ならざるもの」としての両義性である。これらの二つの両義性の根底にある身体の特徴は、前者は“物質性”、後者は“他者性”と言えるであろう。奥田（2010）はこの二つの両義性からこれまでの身体論を整理し、「二つの両義性はそれぞれ独立している」ととらえるのではなく、両者の関係を視野にいれてとらえることが重要である」と述べているが、そもそも身体に見られる両義性はこの二つだけとは言いがたく、それぞれに関係しあっている。本章で身体の両義性を扱った論考をいくつか取り上げ、その関係性について考察していきたい。

3.1. 「現象としての身体」における両義性

まず、これまで見てきた「現象としての身体」（市川，1975）に見られる身体の両義性について、まとめておく。私たちの前に現れる身体には様々な顔があることが示されたが、“両義性”という観点から見ると、＜主体としての身体＞、＜客体としての身体＞という表現からも分かるように、“主客”という両義性に注目して論が進められている。この“主客”の反転は、＜私の対他身体＞と＜他者の身体＞においても起こり、他者との交流、“私”や他者の理解が進むのは、ここまで見てきたとおりである。また、“主客”の反転は、“触れる”ことによって起こることもこれまで見てきたとおりである。そして、“触れる”ことを可能にするのは、次節で考察する“物質性”である。

3.2. 身体の物質性に見られる両義性

私たちが普段接している身体は、見たり、触ったりすることのできる物質性を備えている。この物質性には二種類の性質があると思われる。

一つ目の性質は、上述した“隔てる”という側面である。これは、市川（1975）の＜客体としての身体＞の「われわれに外面をあたえ、われわれを個体としてとどし、他の身体や物体からわれわれを分離する」という身体の側面に特徴付けられるものである。この性質における両義性は、大山（2009）の指摘するように隔てられていると同時に、「身体をとおしてこそ私と他者はつながりうる」という点である。外面があるからこそ肌の触れ合いが可能になり、そのことによって感じられるぬくもりは私たちに、安全な他者とのつながりを感じさせてくれる。隔てられていると言うことは、目の前の他者と入れ替わったり、その人そのものにはなったりはできない。しかし、だからこそ目に見え、質量を持って同じ空間に存在することで“一緒にいる”というつながりの感覚を持つことができる。

二つ目の性質は、身体が物質であることで、私たちは、老化し、朽ちていき、最終的には死すべき存在である性質である。私たちが死すべき存在であるということは、病や怪我に脅かさ

れ、私たちの身体の構造では空を飛んだり、長時間水中にいたりすることもできない。常に肉体的な限界が付きまとう。この肉体的な限界は日常で意識されやすく、“私”という存在を閉じ込め、非常に不自由にさせる手痛い事実ともいえる。しかし、一方で動かぬ“私”の目印としての役割としての意味も持ち合わせていると思われる。千秋（2009）は、自我体験と身体の関係論の中で、「楔としての身体」を提示している。自我体験とはビューラー（Büler, C, 1921/1969）によって提示されたもので、“私”が他の誰でもなく“私”でしかありえないことを直感的に察知する体験であり、これまでごく当たり前のものとしてあった“私”が揺らぐ危機的状况を導くと言われている（西村, 1978; 高石, 1996）。なぜ私はいま、ここにいる私であるのかという違和感から宇宙の成り立ちに思いを馳せるような果てしない問いまで、自我体験には様々な体験が存在しているが、どれもいま、ここにいる“私”から抜け出す視点を持つ。このような“私”が揺らぐ状況下でも肉体的な限界は存在し、身体によって、いま、ここにしか現前しえないという素朴な事実が目に見える形で提示されることで、「私」をこの世界につなげる」（千秋, 2009）ことが可能になる。私が立ち返る目印となるという意味では、身体は“ランドマーク”としての役割も持つと言えよう。肉体的な限界によって不自由であることは、逆説的に自我体験のような“私”とは何であるのかという、果てしない問いを可能にし、つなぎとめる性質と自由にする性質という両義性を示唆すると思われる。

3.3. 身体の他者性に見られる両義性

さらに、身体は“私の体”でありながら、私のコントロールを離れた他者的な側面を持つ。この他者性においても両義的な側面を見ることができる。身体のコントロールのできなさは、身体の日常的な働きにおいて見られる。例えば、24時間心臓の筋肉を意識して動かすなど到底できず、循環器系や呼吸器系、分泌系などはむしろ、私たちの意識的なコントロールを離れて働いてくれないと困るような側面である。病気や怪我で自分の身体が思うように動かなくなった時に、この事実は急激に意識される。このような身体のコントロールできなさは、時に身体を奇妙で脅威的なものとして感じさせ、翻弄される。身体に巻き込まれた状態となる。一方で不具合が出た身体を、ほとんどの場合なんの疑いもなく医療の場に差し出し、まさに“他人事”であるかのように処置を受けることもある。他者的な身体は、侵入的で脅威的な側面と、自分から切り離れた遠い存在としての側面という両義性を持ち合わせているといえる。

上記の他者性に見られる両義性では、他者的な身体と“私”の距離感が問題となっており、まさに、“他者”との距離をどうとるのかという問題とパラレルであると思われる。そして、距離が近すぎれば脅威的な側面であり、遠すぎれば自分から切り離れた側面となる。しかし、このどちらか極端な身体との距離感では身体とうまく付き合いきれないときがある。その一例に月経があると思われる。女性に特有のこの現象は、さまざまな心身の変化を起こすが、その心身の変化が日常生活を困難にすると、月経随伴症状として医療の対象となる。しかし、月経自体は病気や怪我とは異なり、健康な生理現象であり、上記に挙げたような“悪い部分”として割り切って切り離れた側面とすることが難しい。筆者は月経随伴症状をもつ女性にインタビュー調査を行い、月経随伴症状を一つの疾患として捉えることで月経との関わり方が変化している様子が見いだされた（篠田, 2013）。調査協力者らは、最初は月経前や月経中の身体の不調によって日常生活が滞り、ただ耐え忍ぶという距離が近く巻き込まれるような在り様であった

が、月経前症候群という一つの疾患群として身体の不調をとらえなおすことで、医療の場に切り離して預けたり、自分で能動的に対策をとったりすることができるようになると同時に、月経周期に伴うどうしても避けえないものとしてその身体の変化に“委ねる”という関わり方も同時にしていることが見出された。ただ耐えるという関わり方と避けえないこととして“委ねる”という関わり方とは、目に見える行動としては大きく違わないものの、後者では主観的な苦痛は軽減されていた。ここに、“巻き込まれる”という側面と“委ねる”という側面という、先に挙げた身体との距離感が極端になる両義性とは質の異なる両義性を見ることができると思われる。他者的な身体に対して、消極的に受け身であるか積極的に受け身であるかという態度に見られる両義性と言えるのではないだろうか。

3.4. 知覚形態に見られる両義性

さらに身体の知覚形態によっても、二つの性質を見ることができる。野間（2002）は「視覚によって捉えられる、身体像のみならず、肝臓はここにある、脳はこのような形をしている、など、さまざまな知識や先入見で構成された解剖学的身体像」のことを「見られる身体」、「物にふれ、その固さや温かさを感じることによって、それに重なりあう形で、自分の身体の固さや温かさを感じる。あるいは、自分の姿勢や身体の部分の位置を感じ取る。胸の鼓動や息遣いを感じる。これはこれである、とはっきりと名指すことはできないが、私たちが生きていることを確認させてくれる身体」を「感じられる身体」としている。野間（2002）はこの二つの身体の側面に関して両義的な視点からは論じていないが、これらの身体についても両義的な性質があると思われるため、本節で考察していく。

ここで「見られる」、「感じられる」（傍点筆者）という表現をしたことに注目したい。この「られる」は、それぞれ別の文法的意味を読み取ることができる。野間（2002）は、「見る」のは「主体の視線を外に措定した形で、三人称複数としての「ひとびと」」であると述べている。「ひとびと」の見る対象になるのだから、ここでの「られる」は受動としての意味を持つ。一方、「感じられる身体」は「まさに主体そのものに直接与えられ、一人称複数としての「われわれ」（野間，2002）によって捉えられるため「他者との共感」（野間，2012）としての身体である。感じることや共感は自ずとなされるため、ここでの「られる」は自発の意味を持つ。つまりここでみられる両義的な性質は、身体は「見る」という対象となり“受動的”でありつつも、自ずと「感じられる」ような“自発的”な存在であるという性質である。

また、「見る」「感じる」という、知覚形態に焦点を当てると、この二つの身体が別の点からも両義的な関係性を持っていると考えられる。身体を「見る」時の視覚的な把握は、身体の外側からしかできない。野間（2002）が挙げている、解剖学的身体などは外から把握したものをさらに抽象化して捉えなおすという作業が必要となる。一方で、「感じられる身体」の説明に挙げられている、身体の「温かさ固さ」や「姿勢」、「鼓動」や「息遣い」は視覚的な情報を取り除いたときに感じられやすい。そして、それらは内側から自ずと感じられるという性質を備えていると思われる。つまり、身体が「見られる」と同時に「感じられる」とき、“外側”から把握しつつも“内側”からもその存在が主張されるという両義性を持ち合わせていると思われる。この、“外”と“内”という両義性はよりはっきりと、“からだ”という言葉の語源に見られるため、次節で取り上げる。

3.5. 語源に見る身体の両義性

前節の野間（2002）の「見られる身体」と「感じられる身体」は、視覚的に“外”から捉えるものと感覚的に“内”から捉えるものと言えるが、そもそも身体という言葉に含まれる二つの漢字「身」と「体」の語源は対義語的である。

「身」という日本語は多義的であり、現代の身体論の中では、市川（1993）の＜身＞の概念に見られるように、単なる身体を超えた存在を表現するときに用いられている。しかし、語源に返ってみると、日本語の「ミ」には二つの語源的成り立ちがあり、「身」と「実」は同一系列に属していることから、「身」は「実」のつまった身体（鎌田，1994）と言える。また、猪股（2009）は、「身」という漢字の成り立ちが、「人が身ごもったからだを象って」いることから、「身体としてそれ自身ははじめから中にもう一つの存在を抱えている」と述べており、語源的にも漢字の成り立ち的にも、「身」というのは“中身”としての身体である。

このように述べると、この「身」は心身二元論的から見ると、身体に対する“心”と見られがちであるが、この「身」は身体としての性質を失うものではない。野間（2012）は前節で取りあげた「見られる身体」と「感じられる身体」の二重性が世界経験の二重性と重なる部分があることから「世界としての身体」というものを想定している。そして、この「世界としての身体」が「私たちの内から私たちの人生を「生きている」（野間，2012）と表現ができるような存在として考えているが、本節で取りあげている「身」もこの「世界としての身体」と近い存在であると思われる。これらは心身二元論から捉える、感情を持ったり、考えたりするような、いわゆる“心”とは異なり、私たちの内側から働きかける身体と言える。

一方で、「体」の「から」は「殻・枯」と語源が同じであると言われており（鎌田，1994）、古くは「死体」を表していたとされている（増井，2010）。殻は実の外側を覆うあり、内側を守るものと言える。心理臨床では、「殻」の包み込み、保護するという機能や、何かが起こる場として身体が論じられ、その代表的なものは、Anzieu,D（1985）の「皮膚—自我」の概念である。皮膚の包み込む機能や保護機能に注目した概念であると言える。また、高森（2009）は、心と身体と家を「ミクロコスモスとマクロコスモスの照応を表現する一系の象徴群に位置する」という視点から、身体と家について考察し、家屋の描画を見る際の「作業仮説のひとつとして、家の空間性を身体感覚や身体自我の観点から検討してみることは、実践上、有益であろう」と述べている。身体と家の類似性については哲学や心理学においてこれまでも指摘されてきた（Jung,C, 1964/1980；市川，2002）。内を守る外側や、そこで人間の営みが行われる場所としての家と類似性をもつような側面が身体にはあると思われる。“から”としての身体は、命の宿らない空っぽなものとしてではなく、“空”であるからこそ中に別のものが入ることができる、容れ物や場所としての身体と捉えることができる。

語源から見た身体の両義性については、どちらかの側面にだけ焦点を当てて論じられており、それぞれがどのような関係になっているかについて考察されている論考は少なく、これらをあえて“両義性”と捉えるのは性急であるだろう。しかし、身体を「身」という中身と「体」とう外側といった軸で捉えることによって、身体を新たな視点から捉え直すことが可能になるのではないだろうか。

4. 総合考察

4.1. 多次元的な両義性の様相

ここまで様々な切り口からの両義性を見てきたが、ここではそれらがどのように関連しあっているのかを考察していく。

まず、身体の物質性、他者性は、現象としての身体の＜客体としての身体＞の特徴に属すると思われる。＜客体としての身体＞の「われわれに外面をあたえ、われわれを個体としてとざし、他の身体や物体からわれわれを分離する」（市川,1975）という性質は、物質性を説明したものであるし、客体であるということは、“私”との距離があり、私の身体は客体として私に捉えられる限りで“私でないもの”つまり他者としての性質をもつものである。＜主体としての身体＞と＜客体としての身体＞という、“主客”を軸とした大きな両義性の下位に＜客体としての身体＞のどの特徴に注目するかでさらに物質性、他者性という二つの側面における両義性が現れると言える。

ここで忘れてはならないのは、物質性、他者性に見られる主客の両義性の下位にある両義性が生じるのは、身体が“私”でもあって完全に私からは切り離せないからであり、常に身体の主体としての側面がその根底には流れているということである。例えば、物質性に見られる両義性では、私たちを他者から隔てる身体でありながら、身体があるからこそ他者とつながることができるという両義性があるが、他者とのつながりを求める主体がいてこそ、隔てられることとつながることの間を行き来することになる。身体に主体としての側面がなければ、そもそも物質“性”や他者“性”という言い方は成立せず、単なる物質であり、他としての存在でありその性質はなんら問題にならない。先の物質性の両義性を例に考えると、もし身体がおもちゃのロボットのように完全に＜主体としての身体＞の側面を持たないものであったら、他のロボットと隔てられていることになんら不都合はないし、合体できるロボットならば別のロボットと接続できることにも違和感はない。そして、これらの事象は、両義的な関係性ではなく並列的に存在するものとなる。

一方で、語源に見られる両義性は、この“主客”の軸とはまた異なる次元の切り口であるといえる。「身」も「体」も、それぞれ内側と外側で機能しているとすれば、それは主体的な動きとも取れるし、しかし内側にあると外側にあると、そこから距離を取って眺める態度を取ればそれは客体にもなり得る。「身」が客体的に捉えられれば、解剖の対象となる内臓と言えるし、「体」が客体的に捉えられれば皮膚や髪といったものが相当すると思われる。

また、知覚形態に見られる身体については、一見すると、この二つの身体の側面は、「現象としての身体」（市川, 1975）における＜私の対他身体＞と＜主体としての身体＞の別の言い回しのようなのであるが、微妙に異なっていると思われる。「見られる身体」は「自分が他者の身体を見、そして自分が他者の視点に立ち、他者が自分をこう見ているにちがいないと捉える仕方」で構成されている（野間, 2002）と説明され、「他者によって把握された私の身体として、私がとらえる身体」（市川, 1975）である＜私にとっての私の対他身体＞とそのまま対応させて考えることができる。一方「感じられる身体」についてはこのような一対一の対応にはならない。＜主体としての身体＞は「われわれは身体をもつのではなく身体である」（傍点原文ママ）（市川, 1975）と表現されるように、存在としての“私”と身体を同一視するものであるが、野間（2002）；

2012)は“感じる身体”としてではなく、「われわれ」に共有されながらも、自ずと「感じられる」ものとして捉えており、主体と身体を同一視して捉えることとは異なっている。そのため、「見られる身体」と「感じられる身体」は単純に“主客”の軸と一致するものではないと言える。また、前述したとおり、この二つの身体の側面には、“内外”という両義性も持ち合わせており、知覚形態に見られる両義性は、“主客”を軸とした両義性と語源に見られる両義性の両方の性質を持ち合わせた、中間的な両義性にとることができる。

4.2. 身体を生きる

これらの両義性で共通する部分は、両義的な身体のどちらか一方に偏ることなく、その両方の側面が重要であると思われるという点である。たとえそれが、脅威的に感じられるような私たちからすると避けたい側面であっても、私たちの存在が身体と共にある限り、病気や怪我から完全に自由であることが出来ないようにその側面を避けることはできない。私たちはよく“身体がおろそかになる”、“身体性が失われる”という言い方をするが、具体的には、その側面が無いように感じられ、もう一方の側面だけが強調されることを指していると考えられる。ただ単に身体を並列的な側面に分けてしまうのではなく、相反する側面の間を行き来することで、それらの間に関係性が生まれることは、“私”の生成に関係するような「自己関係」(河合, 2000)が身体の次元で生まれることにつながり、そのような身体の在り方が心理臨床で重要となる身体性と思われる。

これまで、心理臨床では“心身一如の視座”が重要視されて来たとし、哲学の分野でも身体を突き詰めると、＜錯綜体としての身体＞(市川, 1975)と呼ばれるような様々な身体や精神を統合した身体が記述されることになる。統合された全体性として現れる身体は確かに重要であるのだが、具体的に考えた時に、全体性としての身体とは結局何であるのか、それにアプローチするというのはどういうことなのかは非常に掴みにくい。私たちがどのようにアプローチするのかという具体的な水準で考える時には、安易に心身を一つに束ねてしまうのではなく、身体を生きぬくという視点が必要ではないだろうか。そして、身体を生きぬくというのは両義的な身体性のどちらをも捨てずにそこに生まれる違和感や、どちらにも割り切ることができないという葛藤を、そのまま据え置くということになるとと思われる。

5. おわりに

本稿では、AであるけれどもBでもある”という両義的な身体性をテーマとし、それらが多層的で多次的に関わりあっていることを考察した。そして、心理臨床における身体性にとってそれぞれの両義的な二つの側面を行き来することが重要であると思われた。

身体は複雑な存在であり、両義性にこだわることで、見落としている性質もあると思われる。両義性からは捉えにくい身体の性質と、今回論じた両義性がそれぞれどのような関係になっているのかをより詳細に議論することが今後必要になるとと思われる。

文献

- Anzieu,D (1985) *Le Moi-peau*. BORDAS 福田素子訳 (1993) 皮膚—自我 言叢社
 Bühler,C.(1921) *Das Seelenleben des jugendlichen*. Suttgart-Hohenheim:Fisher verlag. 原田茂訳

- (1969) 青年の精神生活 共同出版
- 濱野清志 (2008) 覚醒する心体 こころの自然／からだの自然 新曜社
- 市川浩 (1975) 精神としての身体 勁草書房
- 市川浩 (1993) <身>の構造—身体論を超えて 講談社
- 市川浩 (2002) 身体論集成 岩波書店
- 猪股剛 (2009) 身体という間 伊藤良子・大山康宏・角野善宏編 京大心理臨床シリーズ9 心理臨床関係における身体 創元社 261-279
- Jung, C.G. (1964) *Aproaching the Unconscious*. C.G.Jung ed. *Man and his symbols* London 河合隼雄
監訳 (1980) 無意識の接近 In: 人間と象徴 河出書房新社
- 鎌田東二 (1994) 身体の宇宙誌 講談社学術文庫
- 河合隼雄 (2000) 《総論》心理療法と身体 河合隼雄 (編) 講座心理療法 4 心理療法と身体 岩波書店 3-17
- 河合隼雄 (2003) 心身問題と心理療法 臨床心理学 3 (1) 3-6
- 河合俊雄 (2000) 心理臨床の理論 岩波書店
- 増井金典 (2010) 日本語源広辞典 ミネルヴァ書房 p 208、p 836
- 西村洲衛男 (1979) 思春期の病理—自我体験の考察 中井久夫・山中康裕編 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社 225-285
- 野間俊一 (2002) 叙説七 見られる身体／感じられる身体 Groddeck, G.・野間俊一 エスとの対話 新曜社 221 - 234
- 野間俊一 (2012) 解離する生命 みすず書房
- 奥田紗史美 (2010) 心理臨床と身体—身体の両義性および女性と身体について— 女性学評論 (24) 21-42
- 大山康宏 (2009) 心理臨床関係における新たな身体論へ 伊藤良子・大山康宏・角野善宏編 京大心理臨床シリーズ9 心理臨床関係における身体 創元社 13 - 20
- 千秋佳世 (2009) 自我体験と身体 伊藤良子・大山康宏・角野善宏編 京大心理臨床シリーズ9 心理臨床関係における身体 創元社 174-180
- 篠田亜美 (2013) 月経随伴症状をもつ女性の月経体験と身体性についての心理臨床学的考察 京都大学教育学研究科修士論文 (未公開)
- 高森淳一 (2009) 心・体・家—場所としてのこころ 伊藤良子・大山康宏・角野善宏編 京大心理臨床シリーズ9 心理臨床関係における身体 創元社 123-137
- 高石恭子 (1996) 風景構成法における構成型の検討 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 239-264
- 田中康裕 (2003) 夢分析における身体性 臨床心理学 3 (1) 37 - 43
- Valéry P (1932) *L'oeuvre ouverte*, cit., T. II, pp 234-236, p 241, p 250 菅野・清水訳 固定観念 ヴァレリー全集第三巻 215-218、228-229、245
- 斧谷彌守一 (2003) 編者あとがき 斧谷彌守一編 リアリティの変容? 身体／メディア／イメージ 新曜社

(臨床心理実践学講座 博士後期課程二回生)

(受稿 2015 年 9 月 1 日、改稿 2015 年 11 月 4 日、受理 2015 年 12 月 24 日)

心理臨床学における両義的な身体性についての一考察

篠田 亜美

本稿では、身体の両義性に注目し、身体の諸側面について論じた。生きた身体性を捉えるため、まず哲学分野における市川（1975）の「現象としての身体」を取りあげ、私たちが身近に接する身体の諸側面を確認し、次いで心理臨床学的な観点から“主客”、“物質性”、“他者性”、“知覚形態”、“語源”のそれぞれにおいて両義的な身体が見出されることを示した。そしてそれらの両義性の関係についても論じ、“主客”の両義性が一つの軸となっており、＜客体としての身体＞の下位に、“物質性”、“他者性”の両義性が存在すること、“主客”の軸とは質の異なる“内外”の軸の元に“語源”における両義性が存在し、“知覚形態”に見られる両義性は、“主客”と“内外”の両方の軸に関連するものであることが論じられた。そして、身体を生き抜くという観点から、両義的な身体性のどちらにも偏ることなく、その両方を行き来することが重要と思われた。

The Study of the Ambiguity of Body at Clinical Psychology

SHINODA Ami

This paper discussed various aspects of body focusing on the ambiguous body. Not to miss the lively aspect of body sense, it introduced “the phenomenological body” (Ichikawa, 1975) and confirmed familiar body which we come in daily firstly. Secondly, clinical psychologically it revealed that we can find ambiguous body each aspect of body —subjectivity /objectivity, corporality, heterogeneousness, way of perception and the derivation of the word. Then that subjectivity /objectivity is superordinate standpoint and corporality or heterogeneousness is junior ambiguity. Also there is another standpoint which is the inside/outside, on which derivation of the word belongs. The ambiguity in way of perception belongs both standpoints, subjectivity /objectivity and inside/outside. This paper eventually find that it is important not to lean to each of the ambiguity of body, but to sway between each aspect of the ambiguity.

キーワード：両義的な身体、心理臨床、自己

Keywords: the ambiguity of body, clinical psychology, self